

西日本豪雨が加入の決め手

世羅町の農事組合法人さわやか^{とうち}田打は、地区の全戸62戸を構成員とし、約57%の農地を集積する。岡田以得代表理事組合長（60）ら理事7人、常時雇用する2人を中心に運営・主要作業を行う。

同法人は、2年3作で米・麦・大豆を栽培。「コシヒカリ」「あきさかり」など主食用米約23%を主に、飼料用米「夢あおぼ」やもち米「ヒメノモチ」など約8%、麦約13%、大豆約13%、アスパラガス10%を作付けている。

数年前からは、胚芽米で健康に良いとされている「金のいぶき」や、もち麦の栽培を開始。価格や市場の動向を見ながら作付け状況を変えている。省力・低コスト化を図るため、乾田直播や鉄コーティングされた種子の直播に挑戦し、本格導入を検討しているという。

売り上げ全体の3分の1を占める加工品は25種類ほどになる。構成員らが交代でみそやきな粉、大豆や麦を使った菓子などを年間を通して製造。中でも、餅作りは年中行い、地域の道の駅や広島市のスーパーなどに出荷している。

法人を設立して今年で20年。これまで大きな自然災害を受けたことはないという。「昨年の西日本豪雨では、うちの地区はたいした被害はなかったが、近くでは大変な被害もあった。異常気象はいつ来るか分からない。あの豪雨が収入保険加入の決め手になった」と岡田代表は話す。

当初から税理士に依頼し、青色申告を実施。収入保険への加入については、試算して他の制度と比較し検討した。「これまで経営は右肩上がりにきていたが、どこで落ちるか分からない。米価の下落など、収入保険ならある程度はカバーできるのではないか」

同法人の理事の定年は70歳。10年後には岡田代表らの世代が定年となる。「30代を2人雇用しているが、将来を見据え、これからも計画的に雇用していかなければならない。規模を維持し、収入が落ちないように安定してやっていきたい」。

世羅町産業振興課の城西隆志係長は「単収向上、労働生産性向上による収益の追求を積極的に行っている。どこの法人も、高齢化の進行による担い手不足に直面している。次世代に継承可能な集落法人として、今後の展開を期待している」と話す。

（農業共済新聞 中国版 2019年2月2週号より）



世羅町
農事組合法人さわやか田打
代表理事組合長 岡田 以得さん（60歳）